



日本の名随筆
79



小川
国夫
編

作品社



日本の名隨筆 79 港

一九八九年五月二〇日第一刷印刷
一九八九年五月二五日第一刷発行

編者 小川 国 夫

発行者 和 田 肇

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒101 電話(03)二六二一九七五三
FAX (03)二六二一九七五七
振替口座 (東京) 六二七一一八三

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替え致します)

© Kunio Ogawa 1989

ISBN4-87893-979-6 C0395

まどろすの歌

愚かな海鳥のやうな姿^{すがた}をして

瓦や敷石のごろごろとする港の市街区を通つて行かう。

こはれた幌馬車が列をつくつて

むみやたらに円錐形の混雑がやつてくるではないか。

家台は家台の上に積み重なつて

なんといふ人畜のきたなく混雑する往来だらう

見れば大時計の古ぼけた指盤の向うで

冬のさびしい海景が泣いて居るではないか。

涙を路ばたの石にながしながら

私の弁髪を背中にたれて 支那人みたやうに歩いてゐよう。

かうした暗い光線はどこからくるのか

あるひは理髪師や裁縫師の軒にArtistの招牌をかけ

野菜料理や木造旅館の貧しい出窓が傾いて居る。

どうしてこんな貧しい「時」の写真を映すのだらう

どこへもう 外の行くところさへありはしない

はやく石垣のある波止場を曲り

遠く沖にある帆船へかへつて行かう

さうして忘却の錨を解き記録のだんだんと消えさる港を尋ね

て行かう。

（萩原朔太郎詩集）

港
—
目
次

まどろすの歌 ♪ 萩原朔太郎

海辺の窓

港の感傷

横浜の舟待ち

横須賀小景

進水式

黒船の街・函館

港町 第三章 一

気仙沼 けせんぬま

漁港

漁師町にて

或る過程 抄

風待港 外浦・富来町福浦

……三好達治 9

……結城昌治 14

……大佛次郎 18

……芥川龍之介 23

……内田百閒 25

……更科源藏 29

……飯島耕一 34

……高村光太郎 41

……三木 卓 44

……立原正秋 52

……小川国夫 56

……森崎和江 62

敦賀

……小松左京 75

枕崎紀行

……島尾敏雄 81

室の湊へ零れ落ち

……古井由吉 96

平戸の月と海の幸

……森 敦 101

神戸港

……辻 邦生 117

海へ開く門

……山崎正和 123

香港

……野上彌生子 128

旧港

……大岡昇平 134

検疫と荷物検査

……杉村楚人冠 140

桑港 「アポロの杯」より

……三島由紀夫 143

犬が星見た 六月十二日

……武田百合子 148

マルセイユまで

……金子光晴 161

マルセイユ 二月五日

……伊藤 整 171

マントンにて 十月十三日

……森 有正 176

小さな港町

……吉岡達夫 182

ポルトガルの古い港で

……北 杜夫 193

ペナン島の異邦人

……遠藤周作 204

冬海峡 イスタンブール 抄

……藤原新也 215

ロレンソ・マルケス港 モザンビーク

……西江雅之 223

素晴らしき港町 ホーン

……柳原良平 230

あとがき

執筆者紹介・港随筆ブックガイド

〈口絵〉柳原良平「ジェノバ港」

『柳原良平画集 船旅と世界の港町』（講談社）より

〈函絵〉薮関月『日本山海名産図会』より

装丁 菊地信義

港

海辺の窓

三好達治

破風をもる煙かすかに
水をくむ音はをりふし
この庵に人はすめども
日もすがら窓をとざせり

自らから歌つた私の家の海にむかつた窓はその前に藤棚のたふれたのがいつまでもたふれたまま
で、それが新らしく芽をふき蔓をのばし、白き花房が気ままに咲き乱れる時分になつても、めつた
に雨戸を繰つて開け放たれたことがない。けれどもこの庵にも人は住んでゐるので、庵の主は終
日籠居して、時にしばしば、人に語るすべもない物思ひに耽つてゐることが多い。終日書を読み
茶をすすり、物思ひに耽つてゐる初老の男は、夜もまたぼつねんとして、灯下の下で墨など磨つて
ゐるのである。それは十二月も暮れにせまつた、ある月のないまつ暗な夜半のことであつた。その

時分のこととて、海はしつきりなしに激しい怒濤のこゑを、窓下の海、やや弓なりに入江になつて折れこんだその岩礁の上いつばいに、百雷の轟くやうに、寸時のやすみもなしに叫びつづけてゐた。私のいつもいふ、まるで急行列車がトンネルに走入つたやうな、その騒音は、夜の夜中、反つてそれをききなれた私の耳には、はげしい刺戟といふよりも一つの平和な常態で、その騒音は、私の耳には、いはばある安定感の保証のやうなものでもあつた。ところが、その夜はふと、その耳を聳しつづけて鳴りひびいてゐる騒音、疾風怒濤の中に、ふつとかすかに人の叫び声のやうなものがきこえた。夜半に墨など磨つてゐる孤独な男といふものは、そんな騒音の中でも、外界のものの音には意外に敏感なものである。私は耳をそばだてた。その叫び声は、しばらくの間合を置いて、私の推量が途方をうしなつて、自分の耳をうたがひはじめる時分にまたふとかすかに、遠い闇の中に、方角もきはめて曖昧に、まぼろしのやうに、ながく尾をひく呼び声となつてきこえてきた。それはそんな風に二三度もくりかへした。その叫びごゑには、何か哀切な、帛きよをさくやうな、さしせまつた、異常な恐怖を訴へる、誰れにともない救急の呼びごゑのやうな節も感ぜられたし、かと思ふと、その入江にのぞんで建つてゐる料亭の広間で、したたかに酔つ払つたひと組の連中が、何かしら胴間ごゑを張り上げてふざけ散らしてゐる、意味もないたは言のやうにもききなされる節があつた。何しろ季節風の烈風が、絶えず雨戸をがたびしさせてゐる上に、例の急行列車がトンネルに駆けこんだのべつ幕なしの怒濤の声の轟きつづけてゐる中で、まどほな合間をおいてきこえるその声は、何のことやら、私の耳にはさだかに推測のつく訳もなかつた。時間はもう、十二時をすぎて

一時にも近い時分だった。

朝になると、崖下の渚には時ならぬ人出の気配がして、私はまた改めて不安な気持ちに襲はれた。遠方から通ひでやつてくる女中が来たので聞いてみると、昨夜河口で若者が四人も溺死をした、いわし船が転覆したのである、あいにく灯台の灯は消えてゐた、それでその時刻に河を下つて港を出ようとした、この方は噸数のある機帆船と、獲物の鰯を満載して帰つてきた四人乗りの小船とが、またあいにく、つい多寡をくくつて双方とも灯火をつけてゐなかつたので、防波堤をすぎたばかりの河口で衝突をした、といふのである。不幸な豊漁で、無闇と獲物を満載してゐた小船の方は、見る見る水にのまれてしまつた。甲板から抛りだされて流れに漂つてゐたらしい人物の影も、そこは瀬の悪いところで、やがて視界の外に消えて、救ひを求める呼び声も、波にのまれ闇に没してとだえてしまつた。相手の機帆船は、とつさに小まはりの利かない船体なので、みすみす無惨な結果をまねいて、手を下すすべはなかつた、といふ。

ききながら、私はまことに名状しがたい感にうたれた。昨夜私が、墨を磨りながら耳をそばだてた、あの疾風怒濤中のかすれ声は、或は波の上に抛りだされて漂流しつつ、不運な漁夫が必死に叫びつづけた、その呼びごゑではなかつたらうか、或はさうではなくて、相手の機帆船から、闇の中に罹災者をさがしたづねて、声のかぎり呼びつづけたその呼びごゑであつたらうか。それはいづれとも今朝となつては判定しがたい。けれども私の主観では、ふと、最初に私がその声をききとめた瞬間の、かすかなあの胸をさすやうな印象、何とも形容のしやうのないさしせまつた感じ、帛

をさくやうなあゝの哀切な余韻、それはどうも、前者であつて恐らく後者ではなかつたやうに思はれてならない。さうしてさう思ふと、それをききながら、心にいくらか不安を抱きながらも、さて何をしようとするでもなく、机の前で墨を磨りつづけてゐた私が、思はず不仁を犯したやうで、わけもなく氣のとがめる感じをしばらくは如何ともすることができなかつた。それからまた二三日して、かういふ話をきいた。

何がしといふ若者は、その日おそくなつてから強ひて仲間を語らつてあのいわし船を仕立てて沖へ出かけたのだつた。出発が時間はずれた上に、その日の漁は思はぬ大漁だつたので、帰りの時間がまた時刻はづれになつた。それがえんばと月のない闇夜だつたのに加へてまんが悪く灯台の灯が消えてゐた。それでいづれが定め水路を犯したもののかあの椿事を仕出かすことになつた、といふのである。そのやうにして、不幸な事情が重なり合つてあの悲惨事をひき起したのであつたが、もともとそんな時間はづれにいわし船を仕立てることになつた、その理由がまたもう一つ先に在つて、それがきいてみるとまことにあはれである。

何がしといふ若者の宅では、その日の昼頃母ちやが庭の隅の物置小屋に、多分昼食の仕度のためでもあつたらう、冬場の貯へに仕こんでおいたいわしの糠漬けを出しにいつた。いつてみると糠漬の樽はいつの間にやら何者かに盗まれて影も形もとどめない始末。あての外れた母ちやは年よりらしくくどくどくやしまぎれかき口説いた。日頃孝心な若者は、慰め顔にそんならこれからわたしが船を仕立てて明日ともいはずいますぐ、いわしは幾らでも沖からとつてきて上げませう、盗み

たい奴にはせいぜい盗ましとくがいい、何もさうくどくと嘆きなさるにも及ばないことぢやありませんか、お母さん。快活な若者はさういつて、昼すぎになつてからあわただしく船を仕立てて沖に出た。それがあんな始末になつたといふのである。ほんのふとした小さな理由、何ものか隣近所の恥知らずの為にものを盗まれたといふ小さな災難が孝心な若者を促して大きな椿事を惹き起す不吉な発端となつたのだといふ、この噂話はまた、私の先夜の記憶をまざまざとよみがへらして、私の耳にはまぼろしのやうにかぎりなく悲痛にひびいた。

港の感傷

結城昌治

横浜といえは、「別れのブルース」である。こう言う大体の年齢がわかってしまふけれど、家に淡谷の子のレコードがあったのを憶えている。私はまだ子供だったが、「窓をあければ港が見える」なんて聞くと、どこか遠い外国の、言葉も通じない港町のような気がしていた。東京に生まれ、ずっと東京に住んでいる私にとって、横浜はごく近いはずなのに、やはり何となく遠い感じだった。

だから、新婚旅行の目的地を横浜にしたというのも、あながち手近なところで間に合わせようというわけではなかった。仕事が忙しかったせいもあるが、私は横浜を第一候補に決めて彼女を説得した。

「東京からと思えば近過ぎるけれど、九州か北海道からはるばるやってきたと思えばいいじゃないか。実際そういう連中がいるはずだし、ヨーロッパやアメリカからくる者だっている」

要は想像力次第である。